

福音書

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

聞いて、行う

ルカによる福音書 八章一九―二五節

沖村裕史

「イエスの母、兄弟」、「突風を静める」という小見出しが付けられる二つの出来事が描かれています。それぞれ、全く関係のない独立したものであるように思われるかもしれないませんが、イエス・キリストの出来事を「順序正しく書」(一・一)くことを強く意識するルカが何の意図もなく、この二つの出来事を並べているとは考え難いことです。今朝は、その意図を探りつつ、二つの出来事が告げる福音を、ご一緒に味わってみたいと願っています。

まず、前半の出来事です。これと同じ話がマタイとマルコにも記されています。それらと比べると、ルカはこの出来事を大胆に短く、簡略にしていることが分かります。最初にこの出来事を書き留めたマルコは、イエスの家族たちがやって来たその理由から語り始めます。「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になってい』と言われていたからである」。イエスを厄介者と見ている家族のこの思いが、群衆の輪の外に立つ、という姿に現れます。「イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた」。人がいっぱい近付かなかったというのではありませぬ。家族は、イエスとその周囲

に集まってきている人々に、嫌悪感と警戒感を抱いているかのようです。思えばイエスの周りにいた人々の多くは、穢れた罪人と呼ばれる、貧しい人、病気の人、障がいのある人、穢れた職業の人たちだったに違いありません。家族は近づくこともしませんが、イエスも、そんな家族に冷たく言葉を投げ返します。「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」。そして、私のもとに集い、話を聞いているあなたがたこそが、私の本当の家族であり、ここにこそ神の国がある、神の救いもたらされている、と告げられます。マタイもほぼ同じです。

ルカはしかし、家族とイエスとの間で交わされた対立的な記述をすべて削ります。そうすることで、イエスがただ一言だけ語られた、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神のみ言葉を聞いて行う人たちのことである」という一句に、私たちの目を向けさせます。本当の母や兄弟―真の家族とは、神のみ言葉を聞いて行う人たちである。イエスは、ご自分の周囲に集まって来た人々が「本当の家族」になることを願われます。もはや問題は、イエスと家族の対立でも、真の家族とは何かでもありません。問われていることは、神のみ言葉を聞いて行うとはどういうことか、何をすれば神のみ言葉を聞いて行うことになるのかということになります。

ルカは、これに続く「突風を静める」出来事を、単なる奇跡の出来事としてではな

く、この「神のみ言葉を聞いて行うこととは何か」が示される出来事として、ここに書き記しているのです。

この出来事もまた、マルコとマタイにも記されていますが、注目すべきは、最後のイエスの言葉です。「あなたがたの信仰はどこにあるのか」。ルカは今、二つの出来事を並べることによって、イエスが弟子たちに、つまり私たちに願っておられることをはっきりと示そうとします。それは、私たちが「神のみ言葉を聞いて行う人」になることです。そうなることによって、嵐の中でも「信仰がどこへも行かず、ここにある」と言うことができるようになることです。

もし、弟子たちがイエスの求められる信仰を持っていったとしたら、どうしたでしょうか。きっと、弟子たちはイエスを起こさなかつたはずで、嵐は続きます。弟子たちは歯をくいしばって、力の限り漕ぎ続け、たに違いありません。特別なこと―奇跡は起こりません。そのとき弟子たちがするところは、人間として当然なすべき精一杯の努力だけだったでしょう。

そのことはとても困難なことです。しかしそれがイエスの求めておられることでした。そこでは、信仰を持っていない者も持っている者もできることは同じです。それでもひとつだけ違いがあります。それは、ひとすらすら漕ぎながら、私はひとりではない」と知っていることです。「ひとりではない」のです。そのような生き方ができた時に、私たちの心の最も深いところに、本当の静けさが生まれるに違いありません。そのとき、この舟は進み続けます。信仰によって舟が進みます。イエスはそこで安んじて眠っておられます。その姿こそが、弟子たちをますます安らかな思いで、漕ぐことに

専心させるはずでした。それこそが、「神のみ言葉を聞いて行う」ことでした。

しかしそうはなりません。弟子たちに信仰がなかったからです。弟子たちのように、私たちもどこかで奇跡を期待しています。奇跡を待ち続け、だからこそ奇跡を少しもなさろうとしない神に文句を言い続けます。自分たちの信仰はご利益信仰とは違おうと言いながら、結局は自分たちの信仰生活の中でどこかで、神に対して不満を抱いています。こんなに行き詰まっているのに、どうして何もしてくだらないのか、もうこの神には愛想がつきたなどと、呪いの言葉さえ口にし、当然のように自分の信仰生活を放り出してしまいます。そこに私たちの弱さが現れます。

弟子たちの叫びは、信仰のない叫びであつたかもしれません。いえ確かに、信仰がなかったから叫んだのです。叫びながら、イエスのみもとに駆け寄つたのです。ところが、そんな信仰なき者の叫びに、人の嘆きに、悲しみに、訴えに、イエスは耳を傾けてくださったのです。起きて、嵐を沈め、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と諭してください。

この救いを体験した弟子たちは、恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば嵐も波も従うではないか」と言い合います。信仰者として生きるとは、この驚きと問いを常に繰り返す味わいつつ生きることです。そのような体験を、驚きを繰り返していく中で、私たちは、神のみ言葉を本当に神のみ言葉として聞き、それをしっかりと持ち続け、忍耐しつつその実現を待つ者とされていきます。それが「神のみ言葉を聞いて行う」者となることです。

(二〇一八年六月一七日、三位一体後第三主日礼拝)